

太っていることの意味

我が家のオスのチビネコ（まもなく、2歳）は、恋の季節になると遠出をして2、3日帰ってこないことがよくあります。その間は飲まず食わずなのか、帰ってくるとがっついて食べます。そんな時は普段手を付けないような、あまり好みではないエサでも、食べてしまいます。そんなに食べて大丈夫かと心配するのですが、今のところ、食べ過ぎでもなく、かろうじて太り過ぎでもないように見えます。

しかし、太っているという状態は昔の人にとって、どう評価されていたのか、多くのものを飲み込んで太ったネコの存在は、昔話を語り、聞き伝えた人たちにとってどういう印象をもたらしていたのかということが気になりました。前回は、「ちびのふとっちょ」を例にあげましたが、他には太った登場人物の出てくる昔話がなかなか思いつきませんでした。

日本の昔話であれば、「ねずみのすもう」をあげることができますが、あれは、相撲で強くなるために、身体を大きくするというので、単に太るということではないです。

「ももたろう」の話はどうでしょう。モモから生まれたももたろうは、絵本などではふっくらとした男の子に描かれていたりします。たとえば、箕田源二郎描くところのももたろうはどちらかというと、ぽっちゃり体型ですが、まきを拾う代わりに大木をまるまる1本ひっこぬくほどの力持ちです（代田昇文『ももたろう』講談社／1978）。金太郎もどちらかというと、ふっくらしていそうですが、これも相撲がらみです。日本の昔話では太っているというか、ふっくらとしていることは、そう悪いことではないようにも感じます。ただし、正直なおじいさんと強欲なおじいさんがいた場合、やせているのは正直なおじいさんの方かなと思ってしまうのは、昔話のせいでしょうか？

そういえば、君島久子訳の『白いりゅう 黒い

りゅう』（黄芝・孫剣冰編／岩波書店／1964）の中の「九人のきょうだい」（絵本では『王さまと九人のきょうだい』）の中で、「もし、そのようなちからもちなら、きっとおおめしがくえるはずじゃ。」と王さまが言っています。もう一つあったのが、ウズベクの昔話で「王子の五人の援助者たち」（『シルクロードの民話3』／小澤俊夫編 浅岡泰子訳／ぎょうせい／1990）という話の中で、一人目の力持ちの男が巨人のように太った男とされています。いずれも、相撲に似た発想で、どちらかというと、大食い＝太い＝身体が大きい＝力持ちであることが重要です。いずれも、アジアの昔話であるという点は注目すべきかもしれません。

たしかに、重量挙げやレスリング、柔道などの競技は、相撲と同じで、体重が重い選手の方が有利な傾向にあります。柔よく剛を制すとは言いますが、やっぱり、身体が大きい方が有利ですね。

ヨーロッパの昔話で、太っていることが肯定的に（？）描かれるのは、太って脂がのってうまそうだという表現です。たとえば、グリムの「ヘンゼルとグレーテル」では、「にいさんはその納屋の中に閉じこめて、これからふとらせなくちゃ。脂がのったらたべるんだからね。」（相良守峯訳『いばら姫—グリム童話選 I』岩波書店／1966）と魔法使いが言う場面が出てきます。『三びきのやぎのがらがらどん』（マーシャ・ブラウンエ／福音館書店／1965）ではヤギたちは山の草場で太ろうと登っていき、トロールに出会い、自分より大きいヤギが来るから食べないでくれと逃げるわけですが、ここでいう大きいということは食べでがあるということと、大きい方が脂がのってうまいということなのではないでしょうか？ 最後の場面では、「もしもあぶらがぬけてなければ、まだふとっているはずですよ」と言っています。

いずれにしても、太っているとうまいと考えられているということは、そもそも食べられる可能性を持っているということです。

そうすると、大食いネコが太るということは、普段は捕食される弱い立場の動物が逆にいろいろなものを飲み込んで大きく太っていくという面白さを含んでいる話なのかもしれません。しかし、ネコを食べるとするのは…

大食いネコの系列の話は

昔話は、その話を何代にもわたって語り伝えた人びとが、話の中に込めた思いをになっているはずです。アスビョルンセンとモーが編集した『ノルウェー民話集』に収録された「なんて大食いのトラ猫」の話にはノルウェーの人びとのどんな思いが込められているのか、あるいは大食いひょうたんの話はアフリカの人びとのどんな思いを表していたのか。

たとえば、イソップの寓話は最後に語られる教訓が（子どもの頃の記憶ですが）人びとの最も語り伝えたい思いのほうです。「ウサギとカメ」の話ではいくら才能があっても油断して怠けていると、まじめにコツコツと努力した者に負けてしまうということを伝えようとしているのでしょう。ただ、その受け止め方は時代によって違ってくるのですが、詳しくは、府川源一郎『「ウサギとカメ」の読書文化史—イソップ寓話の受容と「競争」』（勉誠出版／2017）を参照してください。

ここで、横道にそれて余計なことを言わせてもらおうと、現実には本当に才能のある人間相手ならば、コツコツと努力したぐらいで普通の人間が勝ることができるかと断定はできないと、今の私は思います。人生そんなに甘くないよなあ。どんなに努力しても報われないことはいくらでもあるし。だからと言って、コツコツとまじめに努力するのは無駄だとは言いません。努力しないで何か手に入れられる「わらしべ長者」のようなことが起きる確率は低いし、普通の人間はコツコツと努力するしかないですよ。凡人である我々は。カメのように結果が出るのは幸せです。ま、結果を求めなければいいのですが。

戻ります。日本に大食いネコの系列の話はないと思いますが（『国際昔話型カタログ』には出てきません）、日本の縄文時代の土偶の中には、「滑らかなラインの造形で腹部を膨らませ、豊かに張りのある尻と脚がしっかりと支えている」（井口直司『縄文土器・土偶』角川書店／2018／角川ソフィア文庫）土偶があります。これは産み・育てるという機能への憧れです。日本と外国との違いは少しはあるでしょうが、子どもの誕生を喜ぶ精神は、人類共通なのではないでしょうか。その点に、大食いネコの系列の話をの原点があると感じるのですが、どうも決定的とは言えない。

他方、教訓話としてとらえると、お腹が空いてどうしようもないからと言って、むやみやたらと食べてしまうと、結局、破裂してしまうような事態に陥るから、欲望のままに食べるのはよしなさいということになるのでしょうか。裏返して言えば、「吾唯足るを知る」ですか。案外、近代的な受け止め方のような気がします。大食いネコの系列の話がいつごろから語られていたのかという問題もあると思います。

あるいは、実はメインのキャラクターはネコなどの大食いする存在ではなくて、それをやっつける側のヤギやシカであるということも考えられます。これはかなり可能性があると思います。特に角のある動物であることが多いという点に何か意味があるのではないかと感じます。この場合は世界の危機を救った勇気ある行動がテーマになるでしょう。また、養ってもらったという恩を忘れておじいさんやおばあさんを食べてしまうものには哀れな末路が待っているという教訓かもしれません。

むしろ、大食いひょうたんの話からすると、怖い話で、ひやっとするのをただ単に楽しむ話ということも考えられます。

いずれにしても、世界中に似ている話があるということは、なんとも不思議なことでもあります。

（さかべ たけし）

呼吸する資料を収集する

—エンパク図書室へようこそ—

藤谷 桂子

私はとある専門図書館に勤める司書である。とある専門図書館とは「演劇」を専門とする博物館の中にあり、高田馬場にある私立大学の構内に存在する。博物館の名称は、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館。通称、演博（エンパク）である。

エンパクは、1928年10月、「小説真髓」でも知られる坪内逍遙博士が古稀の齢に達したこと、またその半生を傾倒した「シェークスピア全集」全40巻の翻訳が完成したことを記念し設立された。そのコレクションは世界各地の演劇・映像に関する貴重な資料を揃え、図書、視聴覚資料以外にも台本や原稿、浮世絵、舞台写真、演劇・映画館プログラム、衣裳、人形、舞台模型などおよそ100万点にもおよぶ。

つい最近では、村上春樹氏の発言からエンパクを知った方もいらっしゃるのではないだろうか。昨年末、村上氏が原稿や自身の蔵書、2万点近いレコードコレクションなどを母校である本学にご寄贈いただくことになった際の会見では、「演劇博物館にはよく通り、古いシナリオをずっと読んでいました。映画を見るお金がないときは、シナリオを読みながら、頭の中で自分の映画をこしらえていました。」とお話された。この話は有名であり、以前から本学のキャンパスツアーガイドがエンパク前にてツアー参加者に毎回説明をするほど。それを知る村上春樹ファンが図書室に来室され、どこに座っていたかを尋ねられることもある（残念ながらそこまでは把握していない）。

昨年、エンパクは開館90周年を迎えた。図書室は翌年に開室したため、今年90周年を迎える。今回は縁あって、エンパク1階に「閲覧室」と看板を掲げ、図書や雑誌などのコレクションを提供する図書室の紹介をしたいと思います。

エンパクの建物は、16世紀イギリスの劇場フォーチュン座を模した意匠であり、楽屋にあたる場所が図書室となっている。図書室は開架式であるが、本学でも唯一、一般の方も自由に利用ができ、学内外の研究者はもちろんのこと、愛好家や地域の中高生

までが足を運ぶ開かれた場所である。

そのエンパク図書室で、私が担う仕事とは、演劇に関する資料を収集し提供するための資料整理と、展示する資料としていかに現状のまま保存するか、博物館ならではの役割を併せ持つ資料と向き合っていくことである。私が収集するのは、明治期以降に発行された演劇に関する日本語の図書や雑誌である。その分野は、「演劇」を広義に捉え、歌舞伎、能、文楽等の伝統芸能に始まり、映画、舞踊、音楽、テレビ、民俗芸能等多岐に渡る。また、市販では入手困難な演劇・映画・テレビ台本や劇団・劇場出版物、シェークスピア関連を収集対象に加え、購入、寄贈された資料の選書、整理を行っている。収集した資料は、演劇に特化したエンパク独自のイロハ分類によって体系化されている。例えば、国劇であれば「ロ」、映画は「ヨ」、民俗演芸は「ヌ」に分類される。そこから更に10～30ほどの項目に細分され、歌舞伎台本は「ロ5」、アニメーション映画は「ヨ12」、落語は「ヌ9」と分類し書庫に配架する。

収集する中で大変興味深いのは、収蔵資料の根幹であり、その人の息遣いを感じる寄贈資料である。台本を例にあげると、台本に残る無数の書き込みから、実際の舞台や映像に至るまでの経緯を確認することができ、監督の演出とそれに応える役者の台詞など現場の空気を体験することができる。また、台本に挟み込まれた資料や保存方法からその人柄を窺い知ることができる。これらの資料は、展示に使用するだけでなく、研究者にも必要とされる貴重な資料となる。ただ資料を収蔵するだけでなく、必要とする人の元へ提供できるよう務めるのも私の大切な役目である。

そんなエンパクは、バリアフリー化に伴う工事のため9月27日まで休館中である。この文章を読んでも少しでも興味を持ってくださる方がいらしたのであれば、あと半年お待ちいただきたい。エンパクが、演劇の魅力に触れるきっかけとなることを願っている。（ふじや けいこ：早稲田大学演劇博物館図書室）

アンネの日記が教えてくれたこと

島田 潤一郎

昨年、文春文庫の『アンネの日記増補改訂版』を読んだ。小学生のころ、アンネの伝記を読んでいたから、ずっとその内容を知っていた気になっていたけれど、実際、この歳になって原典を読んでみると、受ける印象はずいぶんと異なるのだった。

アンネは驚くほどに早熟で、文章に長けた少女だった。けれど、それ以上に驚いたのは、この日記には細部しかないということだった。プライベートな日記だから、それは当たり前なのだろう。ページをめくっても、めくっても、そこには、「アンネがなにをし、同じ住居に暮らす人々がなにをし、アンネが彼らをどう思っていたか」しか書かれていない。

もちろん、その日々のなかには、いよいよナチスに捕まるかもしれないという緊迫の瞬間があり、一方、ペーターへの恋という物語的な要素もあるが、少女の日記はどこまでも少女の日記のままだ。

でも、だからこそ、心に残る。あたかも、アンネが自分の知り合いのように見えてくる。古典というのは、そういうふうにして、多くの人々の心に届き、読みつがれていくのだろう。

たいせつなのは、個人的なことだ。その人にしか感じられない喜びや悲しみ。あるいは、ほかの人からすればどうでもいいような人間関係。そういうものこそ、守られなければいけないのだと思う。

いや、あんな大きな悲しみに比べれば、私の悲しみなんてたいしたことない、とか、地球ではもっとたいへんな目に遭っている人たちがいるのだから、私はがんばらなければいけない、とか、そういう比較は有用なようで、実はそんなに意味をもたない。

読書がもたらしてくれる想像力とは、そういうものではない。地球の裏側で暮らす人たちの生活よりも、隣人の、クラスメートの、同じ会社で働くひとたちの心を想像する力。最初にアンネがいるのではなく、ぼくの友人の向こうに、アンネがいるのだ。

ぼくもまた、アンネのような小さな声を大切にしたいと思う。注意して聞かなければ聞き取れないような声にこそ、耳を澄ませ、そこから企画を立ち上

げていきたいと思う。小さな出版社の役割とは、そういうものではないだろうか。

売れないより売れるほうがいいに決まっている。けれど、売れることだけが目的となってしまうと、本の存在価値はとたんに揺らぐ。その言葉も、その内容も、マーケティング的になり、個人からどんどんと離れていく。

さまざまな個別なことを分類化し、抽象化するという行為は、知性によってなされるものであり、それもまた本がもたらしてくれるものだ。そうした知的な要約なしに、大きな歴史の流れは見えてこないし、哲学や文化人類学といった諸学問も生まれえない。

その意味で、本とは、なにかを要約し、抽象化し、編集することによって、生まれてくるものなのかもしれない。

けれど、そうした本の力、あるいは言葉の力はときに暴力的にもなりうる。

昨今のベストセラーのなかの韓国や中国の人々の描写に顕著なように、そこには暴力的としかいいようのない個の類型化がある。「韓国人や中国人はみんなこういう人たちなんです」といったような文章には、知性がないし、もっといえば、そこにはマーケティングしかない。それは想像力を養うどころか、想像力を奪う。

ぼくが尊敬する書店の店主は、「本は弱者のためのものだ」といった。ぼくはその言葉に勇気づけられるし、そこに自分の仕事の価値を求める。

ぼくもまた、心が沈み込むような暗い時期に、本屋さん、図書館に救われた。そこで自分の人生を変えるようなすばらしい物語に、運命的な言葉に出会ったというのではない。世の中にはたくさん本があるのだ、という事実が、ぼくの暗い心を慰めたのだ。それはつまり、世の中にはたくさん人間がいて、たくさん考え方があり、生き方があり、言葉があるということだ。そのなかのひとりがアンネであり、『アンネの日記』がぼくが教えてくれたことは、個の日々の生活の先に、普遍的なものがあるということだ。(しまだ じゅんいちろう:夏葉社)

アノニマ・スタジオの本作り

村上 妃佐子

アノニマ・スタジオは、
風や光のささやきに耳をすまし、
暮らしの中の小さな発見を大切にひろい集め、
日々ささやかなよろこびを見つける人と一緒に
本を作ってゆくスタジオです。
遠くに住む友人から届いた手紙のように、
何度も手にとって読み返したくなる本、
その本があるだけで、
自分の部屋があたたかく輝いて思えるような本を。

これは、アノニマ・スタジオが刊行しているすべての本の最後に、ひっそりと入れている「ことば」です。2004年に中央出版のあたらしいレーベルとしてスタートした「アノニマ・スタジオ」は、2019年で15年目に入りました。「ごはんと暮らし」をテーマに、料理の本、食や暮らしやものづくりについてのエッセイ、育児の本、絵本、旅のガイドブックなど、多様なジャンルの本づくりをしています。

図書館や書店で置かれる場所（分類）はさまざまですが、すべての根底に流れている想いは、ひとりひとりの「暮らし」がすこしでもよくなること。「アノニマ・スタジオ」という名前にある「アノニマス（＝誰のものでもない、匿名の）」は、わたしたちひとりひとりの生活のことです。いま、この時代に生活している人が、おなじく生活をしている人に知恵をおすそわけするように、自分の暮らしに取り入れたいとなったり、読んだあとに視界が広がったりするような、そんな本を作りたいと思っています。

刊行している本としては、料理家・高山なおみさんの料理本『野菜だより』や日記エッセイ『日々ごはん』シリーズ、随筆集『街と山のあいだ』（若菜晃子著）、実用エッセイ『たのしい手づくり子そだて』（良原リエ著）などがあります。

絵本のジャンルでいうと、アノニマ・スタジオの絵本のラインナップは9割が翻訳絵本です。フラン

ス生まれのしかけ絵本、『ナマケモノのいる森で』、『オセアノ号、海へ!』（アヌック・ボワロベールとルイ・リゴー作／松田素子訳）、イギリスの『台所のメアリー・ポピンズ』（P. L. トラヴァース作／小宮由訳）、『モミの木』（アンデルセン作／サンナ・アンヌッカ絵／小宮由訳）、イタリアの『ふゆ』（このあおい作）、ポルトガルの『もしぼくが本だったら』（J. J. レトリア作／宇野和美訳）と『ぼくのおじいちゃん』（C. ソブラル作／松浦弥太郎訳）、フィンランドの『ひやくおくまんのサンタクロース』

（もたいひろこ作／M. マイヤラ絵）など、いろいろな国のいろんな大きさ、厚さ、判型の絵本があります。

これらの絵本は、見た目も内容も、自由でのびのびとされていて、その本ごとの魅力にあふれています。読者も本を眺めながら、「どんな絵本だろう?」「色あいが素敵だな」「あの人にも読んでほしい」と、どんどん興味がわいてくるでしょう。そんな風に、直観的に本と出会い、選んでもらいたいと思っています。

2018年には、絵本作家・五味太郎さんの、カッターを使ったアイデアブック『カッターであそぼう!』という新たな試みの本を刊行しました。また、1990年に刊行されて絶版だった、絵本作家や詩人、作家たちの対談をまとめた名著を『対談集 絵本のこと話そうか』（松田素子・編）として復刊しました。

「本」は一对一のメディアです。だからこそ、何年、何十年と時間が経ってもあたらしい、本気のメッセージをこめて、読者に届けていきたい。読み終わったあとに自分の暮らしに取り入れたいヒントや日常を照らす光を見つけてほしい。頭で考えるだけではなく、こころとからだの感覚で動かなくなるような、そんなテーマや表現方法を大事にして本を作り、読者へ届けていきたいと思っています。

「アノニマ・スタジオ」の本、ぜひお手にとってみて下さい。（むらかみひさこ:アノニマ・スタジオ）





■過去1年間に出版された本の中から、高校生に薦めたい本をピックアップした「埼玉県の高校図書館司書が選んだイチオシ本2018」が2月に発表された。第1位は『リアルサイズ古生物図鑑 古生代編』（土屋 健 著／群馬県立自然史博物館 監修 技術評論社）で、司書118名によるベスト10が選ばれている。そのイチオシ本を集めたフェアが県内57の書店で開催され、パンフレットが公共図書館等で配布された。

高校生にぜひ読んでもらいたいと投票して本を選ぶこの活動も、今年で9年目だそう。司書同士の横のつながりはもちろん、イチオシ本に選ばれ

た本の著者や編集者のコメントを紹介したり、書店や公共図書館も巻き込んでイチオシ本を広くアピールしたり、多面的で有機的な連携を生んでいることが魅力である。

■先日の毎日新聞には、三重県の名張市立図書館（桜ヶ丘）で「学校図書館司書が高校生におすすめしたい小説100冊」展が始まるとあった。県学校図書館協議会司書部レファレンス研究会が、「面白い小説ない？」などの生徒のリクエストに応えるべく作成したブックリスト『R本』をきっかけに、県内図書館で連携展示が行われているようだ。日頃若者たちと向き合っている司書の皆さんの熱意が、学校から地域へと伝わっている。（ご）